



～ジューラスタ®を使用されている患者さんへ～
がん化学療法による



「発熱性好中球減少症」の発症を抑えるために

お薬説明書

監修・・・千葉県がんセンター 外来化学療法科 部長 辻村 秀樹 先生(がん薬物療法専門医・血液専門医)
看護局 看護師長 山田みづぎ 先生(がん化学療法看護認定看護師・がん看護専門看護師)
薬剤部 関根 佳代 先生(がん薬物療法認定薬剤師・感染制御認定薬剤師)

Question

1

発熱性好中球減少症とは？

A がん化学療法(抗がん薬治療)にともなう好中球減少時に発熱した状態を、「発熱性好中球減少症(Febriile Neutropenia:FN)」と呼びます

好中球の数が500個/ μ L未満、あるいは1000個/ μ L近くあっても48時間以内に500個/ μ L未満に下がると予想される状態で、腋窩体温(えきかたいおん)で37.5℃以上の発熱があらわれることを言います。これは重い感染症につながる可能性があるため、できるだけ予防することが大切です。

参考資料:G-CSF適正使用ガイドライン2013年版 Ver.5(金原出版)

Question

2

発熱性好中球減少症の発症を抑えるためには？

A 好中球を増やすお薬(G-CSF製剤)を使うことで、発熱性好中球減少症の発症を抑えることができます

Question

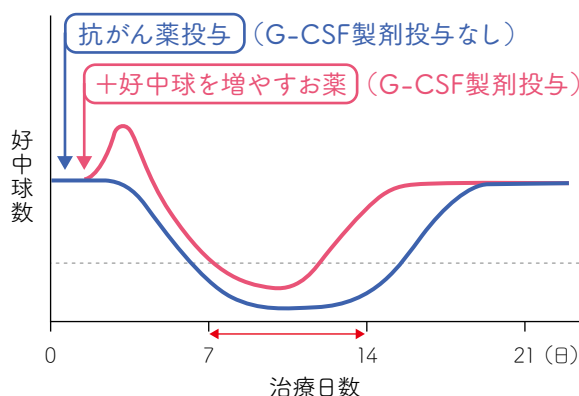
3

G-CSF製剤ってどんなお薬？

A G-CSF製剤は好中球を増やす注射薬です

G-CSF(granulocyte-colony stimulating factor;顆粒球コロニー刺激因子)は骨髄などで好中球のもとになる細胞を刺激して好中球を増やし、好中球の働きを強めます。好中球減少時に連日注射する製剤と、抗がん薬投与後に1回だけ注射する持続型製剤(ジューラスタ®)があります。

好中球減少のピークは7～14日目です。



抗がん薬を投与した後に好中球を増やすお薬を使うことで、好中球が極端に少なくならないようにし、好中球数が少ない期間を短くすることができます。



Q

Question

4

ジースタ®ってどんなお薬？

A 作用時間が長く、抗がん薬治療1サイクルに1回の投与で好中球の減少を抑えるお薬です

ジースタ®の場合

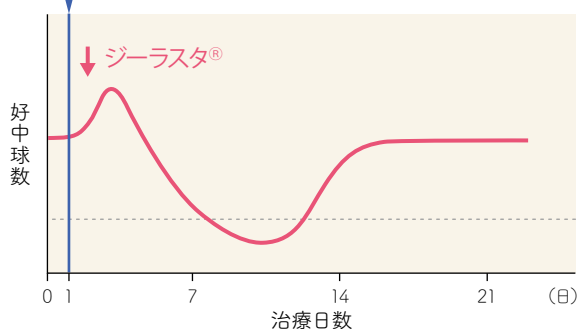
使い方 抗がん薬投与終了後、24時間以降に1回投与（1サイクルに1回の投与です）

〈参考：悪性リンパ腫などの場合〉

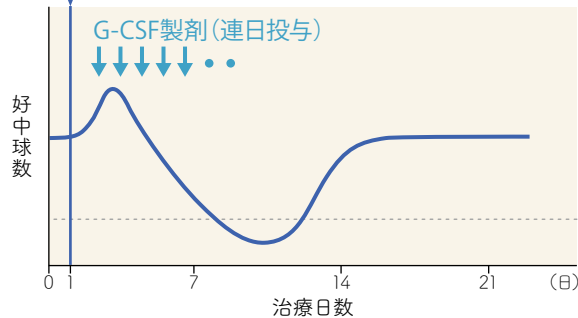
抗がん薬投与後に連日の投与を行うG-CSF製剤の場合

使い方 抗がん薬投与終了後、24時間以降から好中球数が回復するまで毎日投与
注）がん種によっては発症抑制を目的とした投与はできません

抗がん薬投与終了



抗がん薬投与終了



Question

5

ジースタ®の使用中にあらわれる副作用は？

A ジースタ®使用中は以下に記載した副作用があらわれることがあります



これらの症状や、気になる症状があらわれた場合には、担当の医師あるいは看護師、薬剤師に連絡してください。

【重大な副作用】

ショック、アナフィラキシー（薬剤に対する過敏反応）、間質性肺疾患、急性呼吸窮迫症候群、芽球の増加（白血病・骨髄異形成症候群の場合）、脾腫・脾破裂、毛細血管漏出症候群、Sweet症候群、皮膚血管炎、大型血管炎

● ショック、アナフィラキシー

薬剤による過敏反応のことです。投与後すぐに、呼吸困難、じん麻疹、腹痛や嘔吐などがあらわれます。

● 間質性肺疾患（かんしつせいはいしっかん）

肺胞（はいほう）の壁に起こる肺炎のことです。初期症状は、息切れ、空咳、発熱などです。

● 急性呼吸窮迫症候群（きゅうせいこきゅうきゅうはくしょうこうぐん）

肺が急速に障害を受け、肺胞（はいほう）の中に水分がたまります。まず息切れがあらわれ、浅く速い呼吸になります。その後、急激に呼吸が苦しくなります。

● Sweet症候群（スウィートしょうこうぐん）

発熱とともに、顔面、額部、四肢に痛みを伴う隆起性の紅斑があらわれます。

● 大型血管炎（おおがたけっかんえん）

大きな血管の炎症です。初期症状は、発熱、倦怠感、頸部や関節、筋肉などの痛み、めまいなどがあらわれます。

【その他の副作用】

発疹、背部痛、関節痛、筋肉痛、骨痛、頭痛、発熱、倦怠感、肝機能異常（ALT（GPT）上昇、AST（GOT）上昇）、白血球増加、好中球増加、血小板減少、リンパ球減少、LDH上昇、Al-P上昇など

● 骨痛

背骨や骨盤、あるいは関節に、痛みがあらわれることがあります。これは、好中球が骨髄の中で急激に増えているために起こると考えられています。

● 発熱

ジースタ®の投与開始3日から1週間の間に37.5℃前後の熱が出る場合があります。ただし、感染症による発熱のこともあるので、確認することが大切です。